

く議論が始まるような、そんなリラックスした雰囲気だった。

自身の報告には多くの課題も与えられたが、それを発展させるためのヒントもたくさん得る機会となった。また各国、各分野の研究者とのネットワークが広がったことも大きな収

穫である。私が従事する分野にはこれがかかせない。先輩研究者方はもちろんであるが、同年代の研究仲間を得たことも大きいように思う。

(日本学術振興協会特別研究員/  
京都大学東南アジア研究所)

## 〈学会参加記Ⅱ〉

### 国際学会・ワークショップへの参加のすすめ 久野秀二

最近国際学会への参加や論文発表に果敢に挑戦する大学院生も増えつつあるが、私が初めて国際学会に参加したのは北大助手になって3年目、1998年の国際社会学会モントリオール大会である。プレゼンテーションはRaymond A. Jussaume氏との共著論文を分担報告した2000年の国際農村社会学会リオデジャネイロ大会が最初で、フルペーパーになると、北大農学部と協定締結の途上にあつたピソーザ大学をリオ大会終了後に「公式」訪問した際にやらされたミニ講演、ならびに翌2001年にソウルで開催された北大・ソウル大合同シンポジウムでの発表に限られていた。その後、2002年7月から04年9月まで、オランダ・ワーヘニンゲン大学に客員研究員として赴任することになったが、この2年あまりの間、数多くの国際学会・国際会議・ワークショップに参加する機会を得た。以下、そのいくつかを紹介したい。

論文を発表したものとして印象に残っているのは、①渡蘭して数日後、指導していたブラジル人留学生 Simone と臨んだ欧州ラテンアメリカ学会(アムステルダム)である。無謀な日程を組んだのも、研究パートナーの Kees Jansen がコーディネートしたセッションでの報告を要請されたからであるが、同学会に参加していた所属研究室 TAO の PhD 学生(博士課程院生に相当) Lucian と Simone との出会いを結果的に演出することになったのは大きな成果(?)か。もう一つは、②04年4月、OECD のバイオテクノロジー政策に関する論文を発表した TAO 主催の連続公開セミナーである。同セミナーの企画にも関わっていたため、もっとも達成感のある仕事だった。

たんなる聴衆としてではなく、積極的参加

を求められたワークショップないしセミナーとしては、③欧州行政研究所(EIPA)が主催し、OECD が後援した欧州 GMO 政策に関するワークショップ(03年7月、マーストリヒト); ④欧州委員会の助成を受けて欧州の研究者グループが組織した教育プログラム「バイオテクノロジー倫理」ワークショップ(04年3月、イタリア・ジェノヴァ); ⑤研究パートナーでもある TAO の Guido Ruivenkamp がコーディネートした国際農業センターの教育プログラム(2004年5/6月、ワーヘニンゲン)、などが挙げられる。③には20カ国50名以上が参加し、バイオテク研究者、政策担当者、弁護士、企業関係者、社会学者、農業団体・消費者団体など幅広い専門分野の参加者が活発な議論を通じて、リスク・アナリシスの現状と課題について認識を深めた。このワークショップでの報告と議論の内容は、OECD 刊行物としてまとめられている。討論のセクションには、事後的に提出した私の意見も掲載されている。④では、生命科学や生命倫理、法律、社会学などの分野で著名な研究者がファカルティ・メンバーとして組織する講義やグループないし全体討論に、関連諸分野を専門とする大学院生・若手研究者25名が学生として参加。バイオテクノロジーの教育・研究活動に倫理的・社会的・政策的側面を取り入れることの重要性・必要性を確認することを目指した実験的な取り組みで、国籍や専門分野を異にする若手研究者の交流はとても刺激的だった。そこで培った交友と研究者ネットワークは今後の重要な糧になると思われる。これは⑤にも言えることだが、④とは異なって、発展途上国(ケニア、タンザニア、エチオピア、ナイジェリア、インド)から参加した若手研究者との学際的な交流は、別な意味で興味深いものだった。ティータイムや晚餐会、エクスカッションを通じて構築される人的ネットワークは、国際学会・ワークショップに参加することの最大の獲得目標である。業績リスト

を豊かにすることはたんなる副産物と考えるべきだろう。

04年7月末からノルウェー・トロンハイムで開催された国際農村社会学会大会(⑥)に参加したのは、夏のバケーションを兼ねてというだけでなく、北大で指導していたオーストラリア人留学生の発表を予定していたから。妻が合流するまでは、農林水産政策研究所の立川雅司さんや、北米農村社会学会でも活躍しているケンタッキー州立大学 Keiko Tanaka さん、ワシントン州立大学 Raymond Jussaume さんらと交流。エクスカーションではワーヘニンゲン大学農村開発社会学グループの Lewontine Visser 教授と同席。彼女は以前、インドネシアのフィールド調査で京大東南ア研の水野先生にお世話になったとのこと。世界の「狭さ」を味わえるのも、国際学会の面白さかもしれない。

帰国直前の04年9月にベルギー・ルーヴェンで開催された欧州農業食料倫理学会(⑦)では、前記④のワークショップで一緒だった倫理学研究者数人と再会。ワーヘニンゲン大学からも、顔見知りの倫理学教授 Michiel Korthals を含め多くの参加があった。④では英国留学中の台湾人研究者 Serene と交流を深めたが、⑦でもデンマーク留学中の中国人研究者と話がはずんだのは、やはりマイノリティとしての親近感からか、それとも東アジア人としての同胞意識の表れからか？ 倫理学を共通基盤にしているとはいえ、現代農業食料問題にアプローチするためには近接する社会科学諸領域との相互交流が不可欠であるとの認識も強く、次回オスロで2006年大会の

共通テーマを「食の倫理と政治学」とすることに決まっている。GMOを「人道主義」や「環境主義」などのレトリックで正当化しようとする「倫理化(ethicisation/ethicalisation)」の動きも強まっているだけに、倫理問題を「政治化」することの重要性が確認された点に、欧州倫理学の健全性を垣間見ることができる。

これ以外に、内容もさることながら、むしろ開催場所で強烈な印象を受けたものに、ブリュッセルの欧州委員会本部と欧州議会でそれぞれ開催された国際会議がある。「物見遊山」だと怒られるかもしれないが、それができるのも国際会議参加の面白さである。ローマのFAO本部で開催された国際シンポジウムに参加した研究室の同僚が、建物の巨大さを印象深く話してくれたのが思い出される。

なお、以上の国際学会・会議・ワークショップでネクタイを必要としたことは一度もなかった。学会の分野や会議の性格にもよるが、少なくとも夏場の学会でネクタイをするのはビジネス展示会(経営系学会を含む)と日本の学会だけかもしれない。

これらの一部は、帰国後に執筆した論文のなかに活かされてはいるが、多くは書類の山に埋もれたままになっている。たんなる「物見遊山」だったと揶揄されないためにも、まだ記憶が新しいうちに形あるものに残しておきたいと、少々焦っている今日この頃である。

(京都大学)